鳥居龍蔵記念博物館
NEWS LETTER

6
2024 Autumn
Tokushima Prefectual
Torii Ryuzo
Memorial Museum

1921（大正10）年、鳥居龍蔵は学位論文「満蒙の有史以前」により、文学博士の学位を授与されました。鳥居の学位論文は、中国東北部や内モンゴルにおける自身の考古学調査の成果を踏まえて、石器時代の同地域で活動した民族について論じたものでした。惜しいことに、学位論文の原本は、1923年に発生した関東大震災で失われています。しかし当館が収蔵している学位論文の草稿から、その内容を垣間見（かいまみ）ることができます。　（坂東　泰）

今季の逸品

幻の学位論文　草稿

文化の森総合公園
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

2024年度企画展

モンゴルのフィールドワーカー 鳥居きみ子

鳥居きみ子（1881－1959）は、現在の徳島市に生まれました。小学校の教員を務めていましたが、ある時一念発起して修学のため上京しました。その後、東京帝国大学で人類学を研究していた同郷の鳥居龍蔵（1870－1953）と出会い、結婚しました。きみ子は、龍蔵との出会いをきっかけに人類学に関心をいだくようになります。

後には、生まれたばかりの娘を連れた、家族三人でのフィールドワークを通じ、モンゴルの文化や風俗に関する貴重な記録を残しました。また、絵本などで有名な「スーホの白い馬」という話にも登場する、モンゴルの伝統楽器「馬頭琴（ばとうきん）」の名付け親ともいわれています。

この展示では、きみ子が残した旅の日記をはじめ、家族や友人と交わした手紙などから、モンゴルのフィールドワーカー 鳥居きみ子の人物像を描いていきます。

モンゴルの移動式住居ゲルの前 親子３人の写真　1908 年

会　　期　**2024年11月2日（土）～12月8日（日）**

会　　場　**徳島県立博物館１階 企画展示室**

開館時間　9：30 ～17：00

休 館 日　月曜日（11/4［月・振替休日］は開館）、11/5［火］

観 覧 料　一般 200円、高校・大学生 100円、小・中学生 50円
各種減免あり　※割引を希望される方は証明できるものをご提示ください。

主　　催　徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・徳島県立博物館

関連行事

記念講演会

「鳥居きみ子のフィールドワーク －時代を超えた、その意義－」

日 時　11月24日［日］13：30～15：00
会 場　徳島県立博物館 講座室
講 師　小長谷有紀氏（国立民族学博物館名誉教授）
定 員　50名（先着順）
※申込不要、参加無料

特別トーク

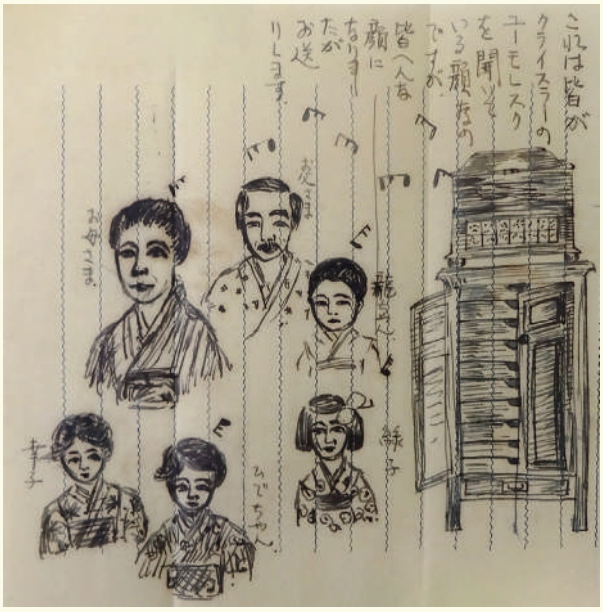
「赤ちゃんと共にモンゴルへ －民族学者・鳥居きみ子－」

日 時　11月3日［日・祝］13：30～14：30
会 場　徳島県立博物館 企画展示室
講 師　竹内紘子氏（児童文学作家）
※申込不要、観覧料が必要

展示解説

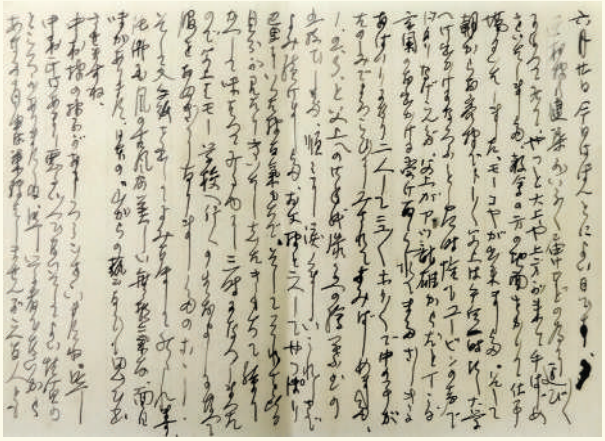
日 時　11月23日［土・祝］15：00～16：00
12月 8日［日］13：30～14：30
※申込不要、観覧料が必要

10代中頃のきみ子
1895年頃



手紙のさし絵　1923年

きみ子の娘 緑子が留学中の兄 龍雄に宛てた手紙のさし絵。蓄音器で音楽を鑑賞中の家族の様子である。



きみ子がフランス留学中の息子に宛てた手紙　1923年

息子から来た手紙を龍蔵と二人で「ニコニコホクホク」で読んだ。龍蔵は仕事へ行くのを取りやめてずっと手紙を読み返している、という家族の愛情が読み取れる。

展示構成

プロローグ
モンゴルのフィールドワーカー 鳥居きみ子

きみ子の生涯を概説します。

Ⅰ 誕生から鳥居龍蔵との出会い

きみ子の徳島での少女時代とともに、上京し、鳥居龍蔵と出会い結婚したことで、人類学に関心を持つまでを紹介します。

Ⅱ 遥かなる大地に誘われて
―きみ子が見たモンゴル―

龍蔵や生まれたばかりの子どもと三人で、モンゴル調査を行った際の様子を紹介します。

Ⅲ モンゴル研究者として、家庭人として

40代中頃になり、フィールドワークの内容をまとめた著書や、その頃の家庭生活について紹介します。

エピローグ 晩年の日々

龍蔵亡き後の暮らしぶりや、少女時代の学友たちと半世紀ぶりに再開した文通など、晩年の日々を紹介します。

フィールドワークの成果をまとめたきみ子の著作
『土俗学上より観たる蒙古』　1927年

20代中頃のモンゴル調査の内容を46歳になってまとめたもの。1200頁近くにおよぶ大著である。

資料整理の最前線

鳥居龍蔵記念博物館所蔵の写真乾板について

―現状と課題―

鳥居龍蔵は、1896（明治29）年の最初の台湾調査で、自ら写真を撮るなど、写真による調査記録を積極的に行い、膨大な写真資料を残しました。当館では、鳥居の調査で撮影され、印画紙に焼き付けられた数千枚に及ぶ「紙焼き写真」や、1500枚以上の「写真乾板」といった写真資料を保存しています。写真乾板は、光を受けると変化する感光物質を透明のガラス板に塗布したもので、フィルム写真のフィルムに該当します。写真乾板は、ガラスの破損や、カビの発生など、取り扱いや保存に様々な問題があることから、そこに撮影された画像を利用する場合は、あらかじめ製作した紙焼き写真やデジタルデータといった複製を使用するのが一般的です。当館でも、所蔵する写真乾板の保存と画像の利用促進を両立するため、デジタル化による画像の複製に着手しました。

作業を進めていると、当館常設展で展示している写真パネルと同じ画像が写された写真乾板を確認することができました。写真パネルは、当館が所蔵する「紙焼き写真」を原板として製作されたのですが、写真乾板はこの紙焼き写真の原板にあたります。今回デジタルで複製した画像の一部（図１）とこの紙焼き写真の画像の一部（図２）を比較すると、画像の明るさや精緻さに違いがあることがわかります。図１は全体が適正な露出になることを優先したものですが、図２は人物の顔がよく見えることを優先して露出を高めにして複製した画像ではないかと推定されます。この違いは、複製方法の違いや技術差に起因するだけでなく、複製制作者の「意図」が異なることで生じるものと考えられます。

ただしそれ以前に、当館が所蔵する写真乾板には、人類学者「鳥居龍蔵」が写真で記録するべきと考えた要素が含まれているはずです。この鳥居の「ねらい」を推定することは楽しい部分でもありますが、画像を複製する際にそれを逃さないよう、また取り違えないようにすることが重要であり、最大の課題でもあります。著者は引き続き、鳥居が定めた「ねらい」を逃さないよう、複製作業を行っていきたいと考えています。

（植地岳彦）

図１　写真乾板画像の複製

図２　紙焼き写真

台湾・蘭嶼（らんしょ）で鳥居龍蔵の足跡をたどる

鳥居龍蔵は、1897（明治30）年10月25日から12月29日までの約２ヵ月間にわたり、台湾・蘭嶼（当時は「紅頭嶼（こうとうしょ）」と呼称）に滞在し、多くの写真を撮影するとともに人類学調査を行いました。蘭嶼は、台湾本島から南東におよそ100km離れた場所にあり、周囲約40kmの孤島です（図１）。鳥居による蘭嶼での調査は、研究者による初めての調査であり、後に鳥居によってまとめられた『紅頭嶼土俗調査報告』は同島初の調査報告書でもあります。その報告書は現在も注目を集めており、2016年には台湾で翻訳書が出版されています。

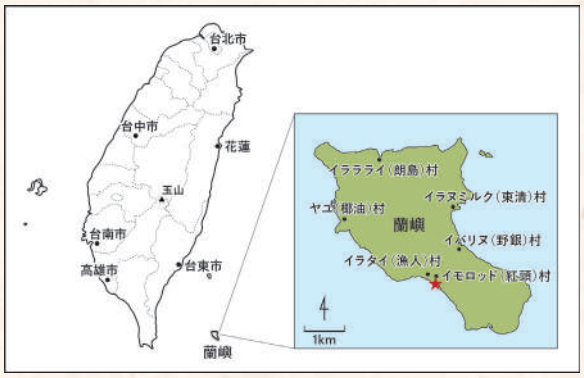


図１　台湾・蘭嶼の位置と鳥居龍蔵のテント設置地点（☆）

さて、2024年５月30日から６月６日の間、筆者を含む当館職員３名は、蘭嶼における鳥居の足跡をたどることを目的に台湾を訪れました。当館と連携協定を締結している国立台湾史前文化博物館の全面協力のもと、野林厚志氏（国立民族学博物館）と宮岡真央子氏（福岡大学）も加わり、計10名で調査に臨みました。

具体的な調査内容は次の３点です。①鳥居が撮影した写真をもとに撮影地点を推定する、②聞き取り調査を行う、③鳥居が調査の拠点としたテント設営地点を踏査する（図２）。ここでは紙幅の関係上、③についてのみ紹介したいと思います。

1897年10月25日、蘭嶼に到着した鳥居は、まず調査拠点となる場所を探します。フィールドノートには、「港の海岸の一小丘上（Taiwan島をかすかに望む所）にステーションを設くることに決し、（中略）其場所の草をかり、先ずテントを茲（ここ）に張りたり」（10月26日）とあります。また、他の資料も参照することで、鳥居のテント設営地点はイモロッド（紅頭）村の海岸近くであることがわかります。

鳥居は、台湾・蘭嶼を訪問するにあたり、徳島市出身の中島藤太郎を助手として雇い、調査に臨んでいました。しかし中島は、1897年12月20日に不慮の事故で負った火傷（やけど）により亡くなります（図３）。当時、鳥居は中島と二人で調査を行っており、鳥居にとって中島の死は痛恨の出来事でした。その後、鳥居は中島の亡骸（なきがら）をテントの傍（かたわ）らに埋葬しました。

今回の台湾訪問によって、鳥居龍蔵が蘭嶼でテントを張った場所、すなわち中島藤太郎の埋葬地点（推定）を確認できたことは、調査成果の一つです。　（松永友和）

図２　鳥居龍蔵のテント設営地点を調査する様子
（2024年６月３日）

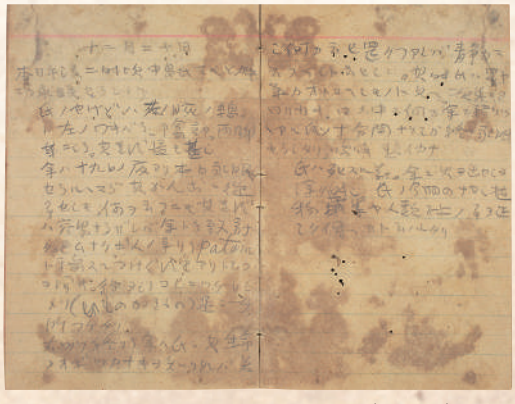


図３　台湾フィールドノート（当館蔵）
「本日午後二時頃、中島氏テントの中にて永眠せられたり」（12月20日）とある

鳥居龍蔵の未刊原稿に関する共同研究始まる

図１　バインダー綴じ原稿の一部

当館では、書籍･雑誌、原稿、写真、ノートなど、鳥居龍蔵の遺品を中心とする様々な資料を収蔵しています。それらの中にあって、独特の体裁なのが、同じ仕様のバインダーに綴（と）じられた37冊の原稿です（図１）。中国東北部・内モンゴルに展開した遼（りょう）王朝の文化に関する研究論文が30冊ともっとも多くを占め、刊行が始まったものの完結しなかった『考古学上より見たる遼の文化』図譜の図版解説原稿や、中国西南部の苗族に関するもの、古代の日中関係に関するものなどがあります。このように規格化された原稿群は、出版を意図して鳥居がとりわけ大切にしていたものと思われます（図２）。

図２　晩年の鳥居龍蔵と原稿群

それらのうち遼関係の原稿は、鳥居の晩年における研究成果の集大成というべき『考古学上より見たる遼の文化』本文として世に出されるはずだったといわれています。事実、原稿の中には､図譜の掲載図版を参照する記載があります。それだけに、これまでにも鳥居に関する研究や、中国・モンゴルなどの歴史研究において、原稿の内容を明らかにし、学界の共有財産とすることが期待されてきましたが、部分的な展示はできても、翻刻や注釈などの本格的な研究には着手できずにいました。

2023年度末に中生勝美氏（桜美林大学）と古松崇志氏（京都大学）の提案があり、遼関係原稿を撮影、翻刻し、さらに注釈を施すことにより、資料として活用できるようにすることを目指し、共同研究を始めることになりました。

そこで、年度の改まった今年４月８～10日の３日間、上記両名が来館し、原稿の現況確認や作業方針の協議を行った上で、一部の原稿について、非接触型スキャナによる高精細画像の撮影に取り組みました。それにあわせて原稿の中身に触れながらの検討をすることもできました（図３･４）。さらに、７月には京都大学に集まり、資料調査とともに、翻刻や注釈に関する協議を行いました。

まだ緒に就いたばかりの取り組みですが、少しずつ原稿の内容を明らかにしていくことで、鳥居の学問の終着点というべき遼研究の全体像にアプローチしていきたいと考えています。

（長谷川賢二）

図３　確認作業

図４　スキャン作業

「アイヌ文化でつながる博物館等ネットワーク」とウポポイ

図１　国立アイヌ民族博物館

東アジア各地を調査した鳥居龍蔵は、1899（明治32）年に千島列島を訪れています。その際に鳥居が調査したのは、千島列島で暮らしていた千島アイヌ（アイヌ民族の一グループ）の遺跡や、彼等の言語・風俗などでした。

鳥居のこうした活動にちなんで、当館は2023年度に、「アイヌ文化でつながる博物館等ネットワーク」に加盟しました。このネットワークは、アイヌ民族の歴史・文化等に関する資料情報の集約と利活用の促進等により、アイヌ文化の振興と啓発に寄与することを目的にしています。今年９月末日の時点で、73機関が加盟し、展示業務の連携をはじめとする共同事業を行っています。その事務局を務めているのは、北海道白老（しらおい）町にある国立アイヌ民族博物館です（図１）。

国立アイヌ民族博物館は、アイヌ民族を主題とする我が国初の国立博物館です。そして同博物館を含むウポポイ（民族共生象徴空間）は、アイヌ文化の復興と発展のための拠点として、2020年にオープンしました。ウポポイの敷地内には、国立アイヌ民族博物館の他に、体験学習施設等から成る国立民族共生公園や、アイヌ民族の遺骨の管理等を行う慰霊施設があります。

筆者は今年の６月13日に初めてウポポイを訪問しました。博物館の展示室では、アイヌ民族の文化や歴史だけでなく、現在のアイヌ民族の暮らしも紹介されています。そして国立民族共生公園では、決まった時間帯に各種の普及行事が行われています。ウポポイ敷地内にあるポロト湖（図２）で催される丸木舟の解説会では、普及行事は来園者にアイヌ民族の文化を紹介するだけでなく、職員の間でアイヌ民族の伝統技術を継承する試みでもあると、教えていただきました。

利用者への対応という点では、公園内にある休憩所が印象的でした。休憩所の中には礼拝室があり、異なる文化的背景を持つ利用者のニーズに対応できるようになっていました（図３）。多文化共生に向けた試みを考える上で、ウポポイを始めとする他の公共施設の取り組みから学べることは多く、今後の当館の運営に活かしていきたいと思います。　（坂東　泰）

図2　ウポポイの敷地内にあるポロト湖

図3　礼拝室がある休憩所

鳥居龍蔵記念博物館の普及行事について

今年度上半期に実施した当館の普及行事と、下半期の予定をお知らせします。

文化の森こどもの日フェスティバル（5月5日）
文化の森サマーフェスティバル（8月11日）

フェスティバルでは、鳥居龍蔵の活動にちなんだパズルやすごろく、民族衣装の試着、カメラの製作と写真撮影をとおして、鳥居の活動を知ってもらうコーナーを設けました。写真は、参加者が手作りカメラを製作している様子です。

令和6年度　鳥居龍蔵セミナー

当館の学芸員らが取り組んでいる研究テーマについて、わかりやすく解説する連続講座です。写真は、第2回「鳥居龍蔵とその家族の映像資料」（6/23）の様子です。

鳥居龍蔵記念　徳島歴史文化フォーラム
ガイダンス講座（6月2日）

県内の中学生と高校生を対象に、自主研究の具体的な方法であるフィールドワークを体験してもらう講座です。高校生6人が参加し、庄・蔵本遺跡でフィールドワークを行いました。

夏休み自由研究スペシャル
「みんなで発見!! 鳥居龍蔵を知ろう!!」（8月4日）

小学生を対象に、夏休み自由研究の課題としてもらえるよう、鳥居龍蔵について紹介する行事です。小学生13人が参加し、当館の展示などを通じて、鳥居龍蔵の生涯について学びました。

下半期の予定

- 鳥居龍蔵セミナー　第5回（12月15日）、第6回（1月19日）　※いずれも日曜日
- 文化の森秋祭り　11月3日（日）
- 文化の森ウインターフェスティバル　2月11日（火・祝）
- 鳥居龍蔵記念　徳島歴史文化フォーラム　2月15日（土）
- 鳥居龍蔵記念　全国高校生歴史文化フォーラム　2月16日（日）
- 鳥居龍蔵ゆかりの地を歩こう　3月16日（日）

※詳しくは当館のホームページをご確認ください。

鳥居龍蔵記念博物館　NEWS LETTER　№6
発行年月日　2024年10月29日
編集・発行　徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
〒770-8070 徳島市八万町向寺山（文化の森総合公園内）
TEL 088-668-2544　FAX 088-668-7197
https://torii-museum.bunmori.tokushima.jp